

## 飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

### 第 465 回 悪業絶たずの化かし合い...AIJ 事件を垣間見る

2012.3.25

今週は「イイケン週刊誌」的コラムになった。 m(\_)\_m

金融商品取引法違反容疑で証券取引等監視委員会(以下、監視委)による強制調査を受けたAIJ投資顧問。運送会社や建設会社など中小企業の厚生年金基金の運用を主力としており、2011年9月末時点で、124の企業年金から1,984億円の資産の運用を受託していた。同社は顧客に対し240%の運用利回りを確保していると説明してきたが、2012年1月下旬の監視委の検査により、運用資産の大部分が消失していることが明らかとなった。これを受け、金融庁は監視委の行政処分勧告を待たず、同年2月24日付で金融商品取引法に基づく1か月の業務停止命令を出した。

と言うのが、連日マスコミで報じられている「AIJ投資顧問」事件の概要である。AIJ投資顧問の浅川和彦社長(59)と、その側近で、週刊誌的に言えば「女帝」といわれた高橋成子取締役(52)の驚きの金満ぶりが判明した。月収はそれぞれ約600万円と約300万円。顧客の目をくらませて、2人は9年間に45億円もの報酬も得ていたという。近年は、その報酬が年間1億数千万円にまで高額化していた。浅川と言う男、「営業熱心で話がうまい。野村証券出身を売りに営業していた」ようだ。同社が資金を託した年金基金側に、旧社会保険庁OBが役員として“天下り”していたほか、厚生省(現厚生労働省)OBが資金集めに協力していたこともすでに判明。浅川社長は、こうした厚労系OBのネットワークを駆使して金集めに奔走していた模様だ。

証券業界関係者は、「AIJ問題なんて氷山の一角だ。これは業界の体質」と断言する。業界大手の日興アセットマネジメントの50代前半の男性は・・・「お客様の利益より当社の利益しか考えていない商品が多い。手数料がたくさん取れて、信託報酬が高い投資信託などが多すぎる」と指摘し、また、三菱UFJFGのMU投資顧問の男性(32)は「年金の運用が主たる業務だが、その社会的意義を踏まえた上で業務に取り組んでいる者がどれだけいるのか、はなはだ疑問だ。自分の持ち場で波風が立たなければいいという空気が蔓延している」と告白している。投資顧問会社の実態について「自前で持っているのは営業チームだけ。だから口利き業とか、情報屋と言われている」と話す。自社の利益追求と無責任体質に加えて、ノウハウもないのでは、顧客が満足するような運用はとても望めないだろう。

(以上、キャリアコネ [http://careerconnection.jp/biz/todaytopics/content\\_21.html](http://careerconnection.jp/biz/todaytopics/content_21.html) より)

お客様の大切な資金を代わって運用しているビジネスの会社として、責任感と緊張感の欠如、もし上記の口コミが真実だとすれば、とんでもない連中が棲む世界だというべきか。AIJの問題をきっかけに投資顧問会社は「投機代行業」から、入念にリスク分散の対策を行う「資金運用代行業」に成長すべきとは、極々当り前の指摘である。

それこそ、業界一丸となった真摯(しんし)な自浄活動が求められている。リーマンショックの元も、安愚楽牧場の破綻も、古今東西、欲の皮が突っ張る顧客がいる限り、悪業絶たずの化(ば)かし合いと、言い放ってはいけない問題かもしれない。